

第 1 回第 6 次山形県教育振興計画検討委員会 委員の意見（概要）

【総括的事項】

- 県が策定する 6 教振では、国の計画を山形なりに消化し、山形の学校現場が目標にして頑張れるようなものを提示することが目的になるのだと思う。
国が計画で掲げていることは外せないので、地域の特性を生かし、力をいれていく項目を明確にできれば山形らしい計画になると思う。
その際、成果目標が大事となり、その際は国の目標と整合性を取る必要がある。
- 4 教振から引き継ぐ「感性」「いのち」という流れは、6 教振でも崩して欲しくない。
- 総合学習の時間が減少する中で、地域の社会、自然を学ぶ時間が著しく減少していることに危惧を覚える。
子どもたちの生きる力、創造力、人や自然との関係性、現場で共に汗を流す共創力を育む場を改めて生み出す必要性を感じている。
- 人口減社会を生き抜く力として大事なものは、やはり山形らしさ。山があって、川があると
いった大自然。これしかない。山形には、自然という本物がある。

【「いのち」の教育について】

- 「命」と一番密接な関係にあるのが農業。「命」を通して学ぶことを基本としなければならない。
東日本大震災を経験して、農業生産高を目標とするような農業の路線が正しかったのかという反省の念が寄せられたが、2 年も経つとまた経済・成長路線に戻りつつあることを危惧している。
- いのちの教育については、理解いただき、浸透させるのに 3 年かかった。ぶれないで徹底して取り組むということが大事である。
- 山形、東北には草木塔、供養塔、残し柿の風習があり、残し柿はまさに山形のもてなしの心である。こうしたものを心の中心軸として残していきたい。
- おそれと敬いの心である「畏敬の念」を社会で大切にしていけることが重要。
「畏敬の念」があれば、体罰やいじめといった問題も起こるものではない。
- 「いのちの教育」は今後も大切にしていきたい。
特に、人としての「命」ということにもう少し焦点をあててみてもいいのではないか。
- 命のバトンを引き継ぎ、新しい命を育てて行くのは自分自身に課せられたことだと自覚させる教育が大切である。
一人でも多く子ども達が自分が将来子どもを持ち、親となって大切に育てていきたいと思う心について、教育の中で大切にしていけることができないか。
- 上杉鷹山の時代に、五人組・十人組という連帯責任を負うやりかたがあり、東日本大震災を機に絆として意識されるようになった。言葉でいうと「怒」にあたる思いやりも大切に、歴史からそれを学べることができたらと思う。

- 上杉鷹山がはじめにしたのは、人々の意識を変えて行く心の教育である。そのようにして人材を育成し、動かしていった。これは、今の社会でも大切なことではないか。

【豊かな心と健やかな体の育成について】

- 保育の現場では、産休明けから長時間で子を預かり、一日の大半を子が保育所で過ごすことが当たり前になってきている。家庭を保育所で丸ごと引き受けている状況だが、家庭も様々な問題を抱えていて多様化してきている。
子ども達も、人と関わるのが苦手、抱っこやおんぶを嫌がる子、発達障がいの子等がおり苦労している。
- オムツはずし、離乳食など、人としてしっかり育つという大切な部分に丁寧に関わることをできないため、子に愛情がもてなくなっているのではないか。
- 働くことを優先させるあまり、逆に親を子から引き離しているように感じることもある。
- 乳幼児期からの生活リズムを大事にしてこそ情緒が安定する。情緒が安定し、その土台があつてこそ、相手を思いやったり、友達を受け入れるという気持ちが育つ。土台がしっかりしてこそ、教育はその上に積み重なるものではないか。
- しつけがしっかりとされていない子どもも多いので、幼稚園でもチーム保育ができる環境を増やしてほしい。
- 5歳児義務化の話がでてきているが、5歳児は義務教育につなぐ大切なのりしろの部分。
5歳児についても、教育として扱い、いろいろな経験をすることで、社会に出た時にこの職業に就きたいという希望を持てるようになるのではないか。
- 当然のようにおむつをした3歳児が入園したり、離乳食を経ずに大人の食事を与えられて入園した子もおり、今の子どもたちはその時その時に経験しなければいけないことを踏まえないで成長してきていると感じる。大人がしつけを怠っているのではないか。
- 母親教育、父親教育、家族を通じて、子どもたちにどうやって関わっていいかを教える「共育」がとても重要。しかし、研修会をしても本当に来てほしい人には参加していただけない。
どうすれば多くの人に参加してもらい機会をつくれるのか検討する必要がある。
- 大学生、離職者、会社員に会って思うのは、しつけの大切さ。ならぬものはならぬということが徹底されていないのはもったいない。しつけは、個々人の基盤となるものだ。
- 体力・運動能力は、子どもの学力を支えるものである。最近はずぐ転んでしまうなど、体力のなさに驚かされることが多い。体力・運動能力を高めていくことは、学力向上を支える上で重要なことではないか。
- 子どもたちの体力が落ちているので、体力向上を下の年代からも積み上げていきたい。
- 体力が低下している、思いやりがない、根性がないといわれているような問題は、自然体験を重ねることである程度クリアされていくのではないか。
- 今の子ども達は自尊感情が低い。自分が生まれてきたことの感謝への気持ちや、生活の中で人の役にたっているのか、といったところの経験が非常に少ないようだ。
「自分が生まれてきたことへの感謝の気持ち」この教育について掘り下げてやってもいいのではないか。
- 10代で親となるお母さんも少なくないため、義務教育の段階で正しい性に対する情報、知識を身に付けさせる踏み込んだ教育も必要である。

- 家庭、学校、アルバイト先等にも居場所がない子ども達の非行が多くなっていると感じる。このような子どもの受け皿がない。対策が必要だ。

【学力の向上について】

- 国語力の育成には、学校図書館の充実を是非お願いしたい。そのためには、人的配置の充実や教員の研修も大事。
- 「英語は言葉という手段でしかない、英語を使って何をすることが大事」という言葉にあるように、英語も他の学習も、動機付けが必要。学校でも子どもたちに動機付けができれば意欲も高まるのではないか。
- 現在の学校教育は「受身の学習」だが、「自ら学ぶ学習」を経験できるチャンスを小学校から与えていかなければならない。

図書館を活用した授業を行うことで、能動的な学習（自ら課題を見つけ、資料、情報を集め、要約して話す、自分の考えを伝える）や協働作業を学ぶことができ、「生きる力」を身につけることができる。
- 図書館を活用した能動的な学習には、教員の的確な「ねらい」や仕掛けが大切なので教員研修が必須。図書館の環境整備には、学校司書が不可欠である。
- 世界的にエコビレッジが作られているが、米沢の里山のくらしでは持続可能な社会であったり、互助・共助といったコミュニティもあり、すでにエコビレッジが存在している。
- 言語化する能力をきちんとつけ、非言語の能力も磨くことによって教育県としての山形が全国に発信できるものになると思う。
- これまでの授業は、先生が説明し、質問し、生徒が答えるといったものであったが、グローバル化社会になった今、先生が教えるだけの授業でいいのかと感じる。
- 持っている知識の中から解答する学力だけでは不十分。今必要なのは、正解がない中で解答を見つける、又は自分も周りも納得できる答えを見つける力。それが身につく授業を行っていかなければならない。
- 身につけるべき力として、次の3点が大事。1 情報収集し、分析し、判断し、行動する力。2 それを他人と協働して行うこと。3 自分だけでなく周りの人を含めみんながもっと幸せになってほしいといった価値観を身につけること。この3点を身につけた生徒が大人になり社会をつくっていくようになるともっと良い社会になるのではないか。
- 社員と対峙している中で、”開かれている組織集団の中での主体性”が、東北、山形の間人として一番弱い部分ではないかと感じている。

【高等教育機関との連携について】

- これからは、各大学や研究機関との連携が1つの鍵になるのではないか。

先端研に高校生が研究生として参加できる取組みが県全体でもできると面白い。

【キャリア教育・職業教育について】

- 高校を卒業して就職した生徒には、しっかりと働き、税金を納められるような大人になってもらわないといけない。
- インターンシップの目標である自己実現や主体的に参加することができる労働観や職業観の醸成を図る為に、学校、担任の先生が常日頃子どもたちとどう向き合っているのか、指導・育成のポイントを、研修受け入れ側に伝えていただく事によって、もう少し深く企業が一緒になって取り組んでいけないかと考えている。
- インターンシップは、学校の成果を出すものでなく、子どもたちの視点で職業体験を通じて自分の才能に気づき、働くことの苦しみや喜びを経験することで本来の自分探しの糸口作りになるものであってほしい。
- インターンシップ受け入れ側と学校側をつなぐなにかしらのツールとして、山形モデルのキャリアノート・キャリア読本といったようなものがあれば、一人ひとりの子どもや学生に則した形で、企業としても本来の目的に参画してつながりが持てるようになり、関わる大人自身が自己実現を目指し主体的に参加する姿を示すことにつながると思う。

【特別支援教育について】

- 特別支援教育は、もっと個々に応じたものにしていくと同時に、個別のニーズに応えるだけでなく社会の中で生きて行くための集団としての活動も大事にしていきたい。
- 特別支援教育では、職員が学校や幼稚園に出向いて、対象の子どもにどのような指導・支援をしたらいいのか一緒に考える取組みを進めている。
子を真ん中において一緒に考えるということが地域の中で出てきている。
- 学校・通常の学級という区分ではなく、社会を通して地域の中で一緒になって考えて行く、学校における教育の充実と通常の学級における充実が一緒になった取組みができるようになるといい。

【地域を愛する心について】

- 四季がはっきりし、人間愛が深いといった他県にはない山形らしさを教育の現場でも追求して欲しい。
- 山形が好きな子ども達が多くなるよう教育立県として進んでいけば、教育再生を成しうるのではないかな。
- 山形には人を惹きつける美しい心を持った人、ものづくりをする本物の人がいるといった良さがある。そんな良さを認識した「山形モデル」を本気で作っていければ、様々な問題の解決の方向性が見出せるのではないかな。
- 山形の良さを活かし、その良さを親にも子にも伝えて、山形の素晴らしさを刷り込んで行くことが大事ではないかな。
- 毎年優秀な卒業生を送り出すが、科学者や作家等で活躍している生徒も多く喜ばしい一方で、優秀な人材を県外に出してしまうことに、これでいいのかなと思う部分がある。
山形に帰ってくる優秀な人材を育てなければならないし、仕組みも考えなければならない。
- 日本らしさ、山形らしさが育ち、世界にでたときもそれを誇りに思うことができる人材を育てて行くことが大事。

【「山形の宝」の保全活用・継承について】

- 山形にはいいものがたくさんあるとお話いただいたが、専門的な立場から見ると、それでもやはりいいものがどんどん減ってきていると感じる。
- 生活様式も変わり、掛け軸といった言葉の意味がわからない子どももいる。文化はあつという間に変わっていくが、山形に残すべきものは残そうとする努力が大切。
- 縄文の女神が国宝になったが、まず「観光利用」ということではなく、文化や教育資源としての価値を十分認識した上で、観光にも活かすという流れになればいいと感じている。

【スポーツの振興について】

- 海外では、国際大会に出場するスポーツ選手が、弁護士や医師というキャリアを持っている場合があり、スポーツエリート育成だけを目標としていたり、社会的地位を築くことだけに専念した教育を行っていないと推察される。
- スポーツの果たす役割としては体力の向上や健やかな体の育成が謳われがちだが、それだけに留まらず、スポーツは他の施策とリンクして取り組む余地があるのではないか。
- スポーツは、人間を教育することやリーダーを育てるために必要なツールとして発展してきている。

ドリームキッズ事業が山形のリーダーを育てることに貢献し、将来財産となる事業に発展していくものとする。

- スポーツを教育に活用するには、場所や人を充実させることが必要。
現場を支える人たちの能力や考え方を磨きあげて、より高度化して活用できるような機会を作ってほしい。

【学校と地域の協働と支え合いについて】

- 学校の現場に（自然）体験活動を入れるのは難しいので、「協働」の視点を採り入れて実施すると取り組みやすいのではないか。
- 親の負担が大きく、加入に二の足を踏んでいることも多いスポ少の問題も、「協働」の視点を採り入れ、単なるボランティアではなく予算も付けることで、解決できるのではないか。
- 子どもの数が約半分になるという今回の資料を見て、教育が今のまま維持できるのか疑問を感じた。だが、子どもの数が少なくなっても教育が廃れるようなことがあってはならない。
- 廃校となった学校と地域がどう関わっていくかという問題も地域コミュニティの活性化の観点から非常に大事である。
- 郷土芸能やお祭りなどが地域からなくなることを危惧し、小学校と地域が連携して取り組んでいるが、そういう取り組みが少なくならないよう頑張っていきたい。
- コミュニティスクールの推進を国では重要視しているが、山形県では地域の中で必要なところでやればいいと個人的には思っている。だが、山形では少し早いと思われることを放っておくと、次の制度に結びつかなくなることもある。国の施策の本線から外れないよう、山形方式を貫きながらも、国の方向性はきちんと押さえる必要がある。